

〔聞き取り記録〕

## 元常任理事・矢澤西二氏インタビュー

### はじめに

早稲田大学百五十年史編纂委員会では、『早稲田大学百五十年史』の編纂を目的として、総長・理事・教職員・学生など、様々な立場で早稲田大学に関わってこられた方々からの聞き取りを進めている。その一環として、今回は、本学元常任理事の矢澤西二氏へのインタビュー記録を掲載する。

インタビューは、二〇〇九年七月一日、大隈会館和室二〇三で行われた。インタビューアは、吉田順一・大学史資料センター所長、真辺将之・同助手、木下恵太・同研究調査員がつとめた（肩書きは二〇〇九年当時）。ただし、当時は百五十年史編纂委員会の発足前であり、本インタビューは大学史資料センターの業務として行われた。その後、編纂委員会が発足し、事務を大学史資料センターが行なうこととなったため、今回、聞き取り記録の掲載について、編

纂委員会より矢澤氏に依頼して掲載の運びとなったものである。このたびの掲載にあたり、委員会の依頼に快く応じ、また、原稿の確認にあたってくださった矢澤氏に、厚く御礼を申し上げる。なお、二〇〇九年当時から状況が変化している部分もあるが、原則としてそのまま掲載した。

矢澤氏のご略歴は以下の通りである。

一九三〇年生まれ

一九五五年 早稲田大学第一文学部卒業

早稲田大学入職（教務部教務課）

一九五九年 総長室秘書室

一九六一年 人事部人事課

一九六五年 教務部企画調査係

一九六九年 総長室企画調査課

一九七一年 総長室企画調整部調査役

一九七六年 総長室秘書課長

一九七七年 創立一〇〇周年記念準備室調査役兼務

一九八〇年 商学部事務長兼商学研究科事務長

一九八三年 図書館事務長

一九八六年 庶務部長、大隈会館事務長兼務

一九八七年 総務部長（機構改革に伴う職名変更）

一九八九年 理事総務部長

一九九〇年 常任理事

一九九四年 総務部参与

一九九五年 定年退職

### 基本諸統計の作成に携わって

**聞き手** 大学の統計を担当されたということですので、まず、そのあたりからお伺いしたいと思います。

**矢澤** 戦後、大学の経営資料になるような統計資料を作っていかなければいけないということは、実はわたしも教わったことなのです。戦後引き揚げてきた満鉄系（主として華北交通）の方々が大学に入って来られました。十何人かいたでしょうか。満鉄系の人たちが早稲田大学の職員や経営者になりました。そのトップが池原義見さんで、島田孝一総長のときの常務理事です。その下には、島田総長の秘書役だった福田英雄さんという方がおられました。政経出身で満鉄の参事をやっていた方です。それからもう一人が、わたしが入ったときの上司の濱田健三教務課長。政経を出て満鉄に入った方です。当時、満鉄はとても調査機能が充実していたため、考え方も非常に合理的で、大学の経営管理の基本に何が必要かがお分かりになっていました。

そこで、その方たちは、「大学の経営管理ないしは事務管理は、こうやっていかなければいけないのだよ」と言う

のですが、一九五〇年代にはかなり戦前からの職員がおり、そのような人たちとは意見がどうも合わなかった。わたしが入ったころもそうだったのですが、調査部というのを最初に作ったのは、この満鉄系の方たちです。

それからもう一つ、経営管理体制を変えようということで、秘書役を中心に動かれた時期があるのです。早稲田の規定集は私立ではかなり立派な方ですけども、これらの方々が中心になって作られました。大学の諸規定を規定集として全部まとめました。そのような中でしたから、調査業務は大事だ、そのためには資料をきちんと集めなさいということでした。

濱田さんが調査主任、調査部の部長になって進められたのは、中国から帰ってきた直後ですから、一九四九か五〇年頃だと思います。統計をとるということで、特に入試統計について、学生の出身地、受験者の集中がどうか、そのようなものをきちんと取りなさいということで始められたのです。それから、国内外の大学関係の資料をきちんと集めなさいということで、それが現在本部にある資料につながっていくわけです。調査係が当時やっていました。

ただ、ずっと続いていたのは入試統計だけです。一時は大学全体の教務白書みたいなもの、単位の問題、学生の履修状況、それから教室の使用状況、そのようなものも含めたものもできたのですが、途中で止まってしまいました。わたしが調査係に所属したとき、それではいけないということで、大学の管理運営とか、大学創設の理念とか、アメリカのものを中心に翻訳業務などもやっていました。大濱信泉総長のときだったと思います。それを引き継いで、わたしは大学の諸統計をもう少し充実させようと思い、「基本諸統計」を作ったのです。当時は、戸川行男先生といろいろ相談をしました。戸川先生は常任理事をやっていて、心理学の先生だったのですが、非常にものごとを合理的に考えられました。「このようなものを作ったら」と、サジェッションを受けながら諸統計を作ったのです。

しかし、あまり大学の人たちに活用されていない。せっかく作ったのですけれどもね。経営の判断材料として面白

いものがあるべきだと思ったのです。財務に関するものもできるだけまとめておこうと思ってやったわけです。わたしは後に日本私立大学連盟の調査委員会の委員長をずっと長く務めたのですが、あの経験がベースになったと思います。そのような意味では、勉強をさせてもらいました。

### 村井資長総長時代のこと

聞き手 次に、『大学の窓から』（矢澤酉二氏定年退職記念出版発起人会編、早稲田大学出版部発行、一九九五年）にお書きになっている時代の後、村井資長総長の時代のことをお聞きしたいと思います。

矢澤 わたしが一九五五年に早稲田へ職員として就職したときの教務部長が村井先生でした。わたしは最初教務課に所属しており、それ以来ずっと村井先生とはおつきあいがありました。村井先生が翌々年くらいだったと思います。が、大濱先生の二次のとき常任理事になられ、お仕事をお手伝いする関係が続きました。それから、村井先生の総長中も長く関係が続き、一九七六年から、村井先生の二期目のときだったと思いますが、秘書課長をやりました。また村井先生を直接お手伝いする関係が生じたわけです。

その前に、いわゆる川口事件（一九七二年）というのがありました。いろいろな早稲田のセクトの運動がずっとあったわけですが、最終的には文学部、商学部、社会科学部を中心に、革マル派が大学の学生運動の体制を支配していくような状況があったと思います。しかし、そのような時代でも、もちろん革マルに対しては、大学としてもいろいろ当時から批判的な対応をしていたわけです。しかし、特に川口事件のときは、村井先生の総長時代のセクトの運動の中では、一番大変な時期だったように記憶しています。川口事件の当時の大学の告示文は、大半はわたしがい

のですが、それらは大学に残っていると思います。

聞き手 『早稲田大学百年史』の年表を見ますと、村井先生が覆面の学生に連れていかれたという記載があります。  
がー。

矢澤 ありましたね。わたしはどのような事件だったかと、今ちよつと記憶にあまりないのですが、学費改定をどうしてもせざるをえないということで、在職中に三回ほど改定したと思います。そのときに学生に何回か拉致されて連れていかれるということがありました。しかし、先生は「警察は入れないでくれ」とおっしゃっていました。最後は解放されましたけれども、蹴飛ばされたり、暴力を振るわれたのは事実ですね。わたしの記憶では、学費関連で引っぱり出されて、学生からある種の拘束を受けたということは、何回かありました。

聞き手 村井先生の長期計画構想として、一〇〇周年の計画がいよいよ策定されるわけですが、非常に広い構想を立てていらつしやつたということで、海洋学部というのも構想にあつたようですね。

矢澤 それはあまりわたしの中に記憶がないのです。一〇〇周年の正式な委員会を作るという形ではなく、ある程度学内の有識者を集めて、理事会のメンバーと、時には学部から何人かお願いしたと思います。どのような選び方だったかは、資料を見ないとわたし自身も忘れてしまっていますけれども、要するに理事者と各学部からの有力な方を何人か指名して、一〇〇周年構想のための委員会を作り上げたのです。

そのときは、一つは管理運営の問題、もう一つは新しい教育研究体制を取扱う二つの委員会がありました。たまたまわたしは、その教育研究体制の方の事務局をおおせつかつて、管理体制の方は、中山敦夫君という企画調整部におた方が担当して、二人で分担して事務をやりました。もちろん部下は何人かいましたけれども。

そのときに海洋学部、附属病院という案は、確かにありました。当時、海洋学部という構想は非常に漠とはしてい

ましたが、今の房総半島の施設につながるような気がしています。寮（セミナーハウス）がある鴨川です。

鴨川には亀田病院という大きな病院があるのです。たまたま村井先生は千葉に住んでおられ、わたしも紹介を受けて行ったことがあります。やはりこれから海外に目をつけるには、海洋学部はいいのではないかとということで、委員の先生方も、校地の候補としては、千葉のどこかと、鴨川かどうかは分かりませんが、構想していたことは確かです。

それと附属病院の構想は、これはむしろ実質的な活動は清水司常任理事が中心でした。榊原仟さんという東京女子医大の心臓病の権威の教授がおられました。今、榊原記念病院というのが代々木にありますけれども、榊原さんは村井先生とも懇意で、もちろん間に何人か人を介しておられたと思いますが、「医学部を作るのは非常に大変だから、女子医大と協力しながら附属病院を作って、医学部を将来作る基礎固めをしていったらどうか」ということで、それで附属病院という構想が出てきました。

榊原先生と折衝していたのはそれ以前で、わたしの記憶では一九七一年から七二年頃ではないかと思っています。これはちよつとはつきりしたものではないのですが、東京女子医大とも交渉がありました。理工学部の先生方で、特に人工臓器、人工血液やロボットの研究をやっていた方には、応用化学や精密機械工学の関係の方が多かった。そのような先生たちがすでに女子医大といういろいろ関係していました。

しかし、委員会では一番はつきり構想を出してきたのは、正田健一郎政経学部長です。「やはり図書館を新しくしなければならぬ」という構想で、海洋学部だとか附属病院とかは、あまり具体的な展開はしていなかったのです。新しい構想の図書館というのはかなり具体化して、一〇〇周年記念事業のメインになりました。その萌芽はこのあたりで始まったということです。

もう一つ、実はこれも裏の話ですが、人間関係学部の構想がやはり一九七五年の初めのころに出てきました。心理

学および社会学の先生とか、理工学部的一般教育の先生たちが、新しい人間科学部のようなものを構想しようということ、相談を持ちかけられてきました。ちょうどわたしも秘書課長をやっていたので、これはあくまでも非公式な活動だけでも、いろいろお金もかかるだろうから、予算をつけて少し勉強してもらおうということで、人間科学部の元になるような構想を、この一〇〇周年事業より前に考えておられました。一〇〇周年構想の中の新しい学部構想のメインは、医学部というよりも、こちらだったような気がします。

そのとき、先生方の一致した意見として、「本部キャンパスでできたらやってくれ」というのですが、大学設置基準上「それはとても無理です」と言わざるをえませんでした。本部キャンパスで実現するのが無理なら、「せめて東伏見でやれ」という。それから、「遠くへ行くのは困る」と。「新しいキャンパスを求めるとしても、東伏見が限度だ」ということでした。しかし、当時とても東伏見を開発する話は難しいだろうなと思いました。当時のスポーツ系のフィールドをつぶさないできません。

**聞き手** 医学部構想というのは、総合医学研究センターという方に行きますね。

**矢澤** そうです。研究の体制については、それに付随する附属病院的なものという構想はあって、医学部そのものができるという構想は当時一つも描けていなかったと思います。ですから、医学部を作るワンステップ前の段階の構想として、医学研究センター的な構想があったと思います。むしろ研究センターの構想ですね。



## 商学部入試不正事件と所沢キャンパス校地決定

**聞き手** では続いて、清水先生の時代です。例の商学部入試の事件があり、大学にとっても相当大きな問題だったわけですが、それを契機にいろいろ大学も変わってきます。職員制度、入試制度等の改革をする。そこで、商学部の事務長としていらつしやる経緯といいますか、そのあたりをお願いします。

**矢澤** 一〇〇周年記念事業のさなか、それがだんだん具体化する段階に、例の幕張か所沢のキャンパスかという問題が起きました。これは具体的には村井先生が辞めて、清水総長になってからの問題だったのですが、村井先生も当時は清水先生に頼まれ、顧問として、部屋まで用意されておられました。むしろ村井先生はいろいろ経営の問題に詳しいから、土地問題は村井先生にやっていただくということでした。そこで、村井先生が中心になって、一〇〇周年事業を実施するための土地を探し始めた。

しかし、時代はもう清水総長になっていて、ご承知のとおり、村井先生は千葉の幕張がいいだろうということでした。実は村井先生が最初に千葉県知事のところへお会いになると、わたしも一緒に一緒しました。千葉県の当時の企画担当の方も出てこられて、ぜひ千葉へいらつしやいという。少し具体化させるために、県との交渉、それから融資の問題がありました。幕張は当時千葉県の第三セクターでやっておられた事業なのです。それで、千葉銀行がかなり出資していた。しかし、「ほかの土地も探さなくてはいけない」ということで、いろいろと探しました。

そのときに西武の方から話がありました。主に西武との交渉には常任理事の勝村茂先生が当たっておられた。それで、村井先生の時代には幕張を、理事会で見学に行っていたのですが、清水先生の時代になって、勝村先生を中心に

所沢の方に傾いていった。それが最後に昂じていって、両方が相争ったという形になったと思います。最終的には、ご存じのとおり所沢に決まったわけです。

たまたまこのように土地をめぐる村井先生と清水先生の意見が対立している時に、商学部の入試不正事件が起きました。わたしはこの事件のとき、ちょうど秘書課長をやっています、犯人から秘書課に電話がかかってきました。わたしが直接受けたわけではないですが、「自首をしたい」ということで、すぐ常任理事が全部呼ばれて、自首してきた犯人をどう扱うかということになりました。大隈会館にひとまず収容して泊めて、警察に告訴することは西原春夫理事が中心になりました。この事件はとにかく受け入れて警察に渡す仕事があるので、「君、やれ」ということで、わたしが校友会館へ夜中に二人に来てもらいました。最初は、二人だったのです。

事情を聞いて、警察へ連れていかなければいけないのですけれども、戸塚署の方で、「そっちで事情聴取を行いますから起こしてください」ということで、真夜中に二人を起こして、調書を取ることが始まったわけです。

そこにこの校地問題が絡んできて、もっぱら千葉側を主として担当していたわたしは、やはり常任理事方との感情的なもつれもあって、「秘書課長をやっているとはいけない、どこかへ移してもらおうかな」と思っていたところでした。そこに商学部事件が起きました。清水総長から、「君、行ってやってくれないか」、「商学部の新体制も整ってきだし、学部長も変わったから、一緒に行つてやってくれないか」ということで、事件があった年、商学部に移ることになりました。

商学部では、朝岡良平学部長他、四人の主任・副主任の先生と職員の何人かの人に入ってもらい、事件がどのような状況でどのように起きたのか、という実態調査をやりました。幸い商学部には過去の入試問題の答案が、旧商学部の建物に茶箱に入れて保管されていました。それで試験問題を少し調べ、答案を調べました。何万もある答案です。

商学部は受験生が二、三万人前後いた時期があります。それを全部見るわけにもいかないし、入試事務でコンピューター処理が行われていましたので、学部長とずっと合格者のデータを打ち出してもらって調べたのです。

要するに、その年に起きた事件は犯人たちの自白から大体分かって、わたしが行った段階で新入学生の入学を取り消していた。六月のことです。しかし文句を言ってくる。「なぜわたしの息子が」と言って。わたしどもはその父兄との対応をしました。校友会館へ来てもらって、聞いてみると、まさにお金が動いているということが分かりました。しかし、過去にもそれは当然あったという自白がありますし、警視庁からも検察庁からもそのような状況が知らされてきていました。

入試データを見ると、不正をやった年の、その年度の不正事件の受験番号の層に非常に類似性がありました。一定のところを集められている。その手で過去のもの、前のものを見ていきますと、大体その答案を書き変えるために、ある層のところに学生の受験番号を集中させているのです。ばらばらだと、三万ぐらいから改ざんするのは大変です。やはり、連中の知恵だったわけです。

したがって、その類似性を見て「これが危ないな」と。申し訳ないのですが、とても商学部に入れないような学校から結構高得点で入っている。かつ受験番号がある層に固まっている。その答案を職員の人たちに出してもらったら、やはり字が違う。職員の人が書いた字のものがある。筆跡から見て大体分かるようなものが多くありました。それで、過去にさかのぼって、六〇人ぐらいでしょうか、退学処分にしました。該当する父兄に来てもらって、学部長、教務も中心に、「あなたのお子さんには、このようなことはなかったですか」ということで、全部聞き取り調査をやりました。翌年だったですかね、それをまとめて教授会に出しました。身分もあるし、名前を出さないで、信頼してくれということで教授会に諮り、除籍処分にするなどしました。

**聞き手** これは大学史の中に、どこかの段階で書くことになると思います。幕張や所沢のことも、話を伺った方から必ず出てきます。「一番詳しいのは」とか、「真相は」とか、どうも何かはつきりしないところがあります。

**矢澤** それには価値判断の問題があります。わたしなどは、確かに初めは、幕張は坪二〇万で、開発費が平均で二〇万近くかかっている。こちらの所沢は西武がもつと安い値で買っていますから、一〇万以下で売れるという。そうすると、どちらが新しい学部を作るのによいか。大体あのときにはスポーツ系、人間科学部系の学部をということは、ほぼ確定していました。そうすると、「グラウンドがなくてはいけない」とか、「環境がどうだこうだ」と、金額的には絶対に所沢の方が安かった。それで千葉側も焦って、最後は「一〇万下つてもいいです」という話を持ってきたのです。そのときにはもうわたしなどの手よりもつと上の、理事会サイドの方々のいろいろな価値判断があったような気がしています。

この問題を後に有識者の方と話し合うと、「やはり両方買っておけばよかったね、しかし今考えたら、大学のためには幕張がよかったね」という。客観的な利用価値、その他からすべてがね。

所沢の開発の方の話は、一番詳しいのは教務部長だった川瀬武彦先生ですが、亡くなってしまいました。受けてから開発するため、これはもう教務部長がものすごく苦労されていました。

**聞き手** ちょっと基礎的な質問なのですが、現在の幕張のどのあたりでしょうか。

**矢澤** 幕張の駅はご存じですか。今、京葉線がありますね。京葉線の北側です。東側に花見川という川がまつぐ流れています。要するに開発の一番北東側です。その線路から北側の花見川の縁までの約一〇万坪です。

**聞き手** 相当に広い場所ですね。

**矢澤** ええ、今は公園と住宅になっています。当時、理事会内でも意見が多様で、部長・課長クラスを含めいろいろ

考えを述べ合いました。わたしも開発の余地が無限にあると考えていました。「埋立地だから、海風が吹くと野球の球が飛んでしまう」という反対説もあって、その後、千葉のプロ野球チームはもつと南に野球場を造ったので、あとで笑ったものですが、そのような話もありました。

特にボートをやるには花見川というのは非常にいいのです。まっすぐ直線で二、三〇〇〇メートル取れます。「ここでボート競走をやったり、ボートをやったら楽しいね」という話が出ました。いずれ国際交流関係の学部もできるだろうから、海外に出る成田に便利というのは、一つの利点ではないですかね。所沢ではふん詰まりです。それから京葉線が通るということが分かっていました。今、本当に客観的に言ったら、土地の資産価値も幕張と所沢では大分違うと思います。

**聞き手** 結局、所沢に決めるに至った決定的な要因は何でしょうか。

**矢澤** やはりそれは清水総長の理事会の方々が、あちらを主張したのです。あれはやはり西武の堤義明さんの辣腕だったと思います。

西武もいい側面はありまして、新しく本部棟となる大隈会館を造るとき、北側の道路に面して、今緑地になっているところがありますが、あれが西武の所有地なのです。西武の土地でしたから、建物が建てられなかったのです。そのようなことで、この話はずっとあとですが、「全部をもらうわけにはいかないだろうが、何とか土地を分けてもらえないか」と西武に申し入れたのです。たまたま西武鉄道の社長が堤さんから替わっていて、早稲田のOBで昔からつきあいがあった人でしたが、譲ってくれないかということで、分譲してもらったのです。それで、この建物（大隈会館）が建てられたという経緯がありました。

**聞き手** ここは大隈さんの庭園ではないのですか。

矢澤 北側は西武の土地だったのです。今も一部、一〇〇坪以上はあると思いますが、西武の土地です。早稲田が譲ったという説もあるのですが、そのへんは少し古いので分かりません。しかし、東伏見を西武鉄道から譲り受けたときに、西武鉄道はここに鉄道の都内の終点を持つてこようとしていたという説があります。確かにそれは、先代 の堤康次郎さんは考えておられたのではないのでしょうか。最後は新宿の方に曲げられたけれども、西武鉄道が高田馬場を終点にしないでこちらへ持つてくる。それで東伏見を西武から譲り受けるときに、「こちらの土地を少し分けてくれ」ということで提供したのだ、というように聞いています。そのようにいろいろ便宜を図っていた面もあります。

聞き手 幕張は潮風がという話が『早稲田大学百年史』に少しだけ書いてありますが、そのようなものだったのでしょうか。

矢澤 埋立地ですからね。昔の千葉というのは、ご存じのとおり、旧総武線のところ近くまで海が入っていました。それから、花見川がすぐ流れている。ただ当時はもう花見川の反対側には住宅がいっぱいあって、早稲田大学の教職員の方たちも何人も住んでいらつしやるし、公営住宅もあった。だから、理由は値段が高かったというそれくらいしかない。しかし、それも綱引きがあつて、値段を最後は下げてきました。

#### 早稲田大学図書館事務長として

聞き手 次に図書館の事務長になりました。旧図書館の思い出と言いますか、当時の図書館の状況などをお伺いしたいと思います。

矢澤 これには、実は総長選挙がらみの問題もありました。西原春夫先生と本明寛先生が選挙で争った。わたしは商学部で事務長をやっていた。幕張に近い考え方を持っておられた方たちが本明先生、反対側の方たちが西原先生をという状況で、わたしはどちらかと言うと、本明先生の方の陣営を応援しました。選挙で負けて、わたしの人生も大体これでけりがつくかなと思いました。もう大学は辞めてもいい格好でやったわけです。結果は負けで、終わりだなと思っていたところ、商学部の事件も一段落しましたし、その頃、職員の上層部から呼び出しを受けまして、「あんた、どうするのだ」と言うから、「大体覚悟を決めている」、「選挙のこともあるし辞めたいと思っています」というように話したら、「それなら心機一転して図書館を手伝え。濱田泰三図書館長はもう決まっている。濱田泰三先生にも聞いたら、矢澤なら一緒に仕事できるから、過去を忘れてやらないか」と誘いを受けました。

実は、濱田先生も西原先生は直接わたしには言わないで、わたしの先輩の職員を通じてお話をいただいた。私自身も早稲田に愛着がありましたから、図書館に行くことをお受けしました。

ちょうど図書館が一〇〇周年記念事業の一つとして、移転を考えなくてはいけないという時期でした。濱田先生は非常にものを考えるのが合理的な方で、あまりそれまではわたしはおつきあいがありませんでしたが、いろいろな意見交換をしました。図書館に対する考え方は非常に近い、似ているなと思いました。

わたしも実は、最初に職員希望を出したとき、図書館へ行きたかったのです。将来は研究の方に行きたいなと思っていたのです。志と違って本部へ入れられてしまって、本部ですと生活したものですから、図書館に対する強い思いがありました。その頃圖書の情報化入力などの問題で図書館員も右往左往しているような、非常に不安定な時期だったですね。若い職員と年寄りの職員の方の間に意思がうまく通じていない、そのような状況だったので、「これなら何とか職員をまとめられるな」と思いました。

当時、全学には図書に関連する施設が沢山あり、それらに携わる司書は図書館とは別の所属でした。それをわたしは「これはいけないぞ」と、「司書職を一本に全学まとめて異動もできるような体制に持っていけないと、同じところまで一生涯終えてしまうような職員の人が出てはまずいではないか」と思いまして、司書職を全学で一本化したのです。これは割合スムーズに行き、理解が得られました。職員を活性化させる一つの大きな原因になったと思います。あとは、濱田館長と合宿までした今日・将来の図書館計画です。これは濱田先生からお聞きすれば分かんと思いますし、私自身図書館紀要にも書いておきました。<sup>①</sup>

新しい図書館の建設前に一番苦労したのは、旧図書館の収容力の問題です。六〇万冊ですでにパンク状態でした。新刊図書を買うと旧刊図書が入りきらないということで、デポジット・ライブラリーという構想を立てました。図書館の人たちもそのような思いを持っていたので、デポジット・ライブラリーを造るということをやりました、場所としては、本庄キャンパスしかないだろうと、デポジット専用ライブラリーの建物を造りました。

ところが、問題はそこにとどの図書を持つて行くかということです。これは、当時副事務長の千葉敏さんがいたのですが、彼は利用度の低いものを対象にすべく、過去の図書利用カードを分析してやってみました、情報化が進んでいない時代ですからとても大変な仕事量で無理なことがわかりました。

それで、最終的には、洋書の利用は特定の人に限定されているので、小寺文庫を持つて行こうと考えました。しかも、社会経済関係は、政経学部でも、商学部でも、法学部も含めて、教員図書室が充実してきている。しかし、小寺文庫には特定の研究者には非常に利用度の高い歴史関係、社会経済史関係の図書がありました。それで、公聴会を開いたら案の定みんなにたたかれました。

そのようなことで、古い合冊の定期刊行物とか、小寺文庫を強引に持つていったのです。その代わりに、「毎日、



利用してほしい物があつたら運びます」という条件をつけられました。図書館の本というのは、高等学院でも利用の要求があるので、日本通運によつて毎日発送する方式ができていました。本庄高等学院の先生たちもこちらの図書を利用しますので、要求のある図書を毎日運搬させると言つたものですから、納得までいかなかったですけれども、やつと説得出来ました。「できあがつたら、小寺文庫は戻す」ということを条件にしました。そのようなことで、あれは苦勞しました。新館ができあがつたときは、ちょうど濱田先生もわたしもう大学の本部に入つてしまつていて、奥島孝康館長の時代ですが、濱田先生が一番苦勞したと思います。新しい計画に対する苦勞です。

**聞き手** 新館建築の設計プランができあがつたのはいつごろのことでしょうか。

**矢澤** それまで大学の建築設計というのは、ほとんど施設部の他に理工学部の建築科の教員に頼んでいたのです。それも研究室単位です。ですから、この建物は何々先生の研究室で設計する。施工工事の計画は、施設部が担いましたからそこでやります。大隈講堂以来、設計自体は大学の先生たちが研究室単位で担当していました。施工工事の事は施設部がやっていました。

しかし、建物が大型化してくると、「一研究室へお願いする仕事ではないぞ」という考え方が出てまいりました。また、先生方の個性があつて、必ずしも利用者との関係ではうまくいってない。そのようなことがあります。濱田先生と考えると、「今度だけは外部に頼もう」ということで、西原総長を説得しました。西原先生も「これだけ大きいものを造るのに、一研究室ではないよな」ということになりました。外部に頼むについても、「先生方から批判が出ないような形にしよう」ということで、日建設計を選んだのです。その当時、日建設計の社長が早稲田のOBで、かつ早稲田建築学会の会長をしておられたので、「これなら反対はないだろう」と。また、日建設計といえは、日本の最高レベルの権威ですし、そこをお願いすることにしました。しかし、建築科の先生からはものすごい批判がありま

した。やり合いになりましたが、結局、最後は日建設計にやっていただきました。

あれから大学の建築はだんだん大きくなってきましたし、ほとんど今は外部です。特定のものの以外は外部の建築、設計会社にお願ひするという習慣が続きました。昭和の戦前から一〇〇周年記念事業の前までは、建築科の先生に依頼するか施設部で行うというのが、オーソドックスなやり方だったのです。

### 相次ぐ外国来賓への対応

**聞き手** すると一応その設計を依頼することが決まったあと、図書館から去られたということですね。それで本部へ移られたのですか。

**矢澤** ええ。一九八六年に図書館の設計も大体終わりました、そのときにはもう建て始められていたと思いますが、「もう図書館はいいだろう、本部へ戻れ」ということで、庶務部長、これは後に総務部長という名前に変わりましたが、本部へ戻ったわけです。ちょうど西原総長の二期目のときです。多少は「こいつは使えるぞ」と思われたのだと思います。本部に戻されました。

戻った直後、たちまち大変だったのは、フィリピンの女性大統領アキノさんの名誉学位授与式が、ちょうど一二月だったと思います。それで、この準備をやれと言われて、これは大変だと思いました。名誉学位の授与は、教務部と総務部とが一緒にやるのです。施設の運営その他は庶務がやって、授与に関するものは教務部がやります。大隈講堂で授与式をやったのです、これは大変でした。警備の問題が大きいですね。警備と向こう側との折衝。ええ。名誉学位が出るたびに大変でした。一番思い出になるのが旧ソ連のゴルバチョフ大統領。「彼に名誉学位を贈る」

と、西原先生のと看でしたが、来る、来られないということ、とうとう最後はやめてしまったと思います。

面白い例では金泳三大韓民国大統領。名誉学位をさし上げるといふ話が出てきて、わたしはちょうど常任理事になつていました。総長が小山先生に替わつていたのですが、そのとき、「早稲田で引き受けてくれ」といふ電話が大使から直接かかつてきたのです。私が大使館へ行つていろいろ話をしたら、領事官といふすか、審議官、参事官か、慶応出身の方が非常に多いのです。慶応には有名な朝鮮関係の教授がおられ、慶応から要請を受けていて、駐日韓国大使は「参事官たちが慶応も候補に挙げてゐる」といふので、「わたしはそれでは引き下がりません」、「慶応でやつていただけるのなら、早稲田としてはそれでも構いません」といふました。理事会で一任を取りつけて行つていましたから。帰つて報告したら、「しょうがないよね」と小山さんに言われて、そして、帰宅しようとするところに、また電話がかかつてきて、大使から「わたしの最終決断で、これはぜひ早稲田にやつていただきたい」、「大統領もそのような意向です」といふ話がありました。いろいろとありましたが、結局、早稲田になりました（一九九四年）。

クリントン米国大統領が来日したときも、大変でした（一九九三年）。クリントン大統領ご夫妻はただ大学訪問で来たわけですが、当時の政治事情で国会での演説ができなかつたのです。どこの国でも米国の大統領が大学で講演するというのが一つのステータスになるわけです。当時、アマコスト米国大使でしたが、早稲田を指定してきました。アマコストさんのご子息が、確か国際部の学生でいた経緯があるのです。そのような関係もありまして、「早稲田で引き受けてくれないか」といふことで、話が進んだのです。

アメリカの場合は、大統領についてくる特別顧問、演出家がいるのです。アマコストさんに実権がなくて、どのようなやり方でやるかといふ交渉はその人がやる。概要はもちろんアマコストさんも知っていますけれども、講演会の運び方は、ほとんど連れてきた演出家がやるわけです。それで、当時大隈講堂には冷房がなかつたものですから、冷

房を一時的に設備しました。お金がとてもないから、企業に賛助金をお願いして、あれは大変だったですね。

来校の前の日に、アマコストさんが「矢澤さん、一人で大隈講堂の前でわたしと一緒に会ってくれ」と言われ、それで大隈講堂の前に一人で立っていました。「あした大統領が来る道順を一緒に全部回ってくれ」ということで、講堂から全部を回りました。そうしたら、町の方へ歩いていくものですから、「それ道順ですか」と聞いたら、「いや、内緒だ」ということで、「西早稲田商店街を歩かせてくれ。」と言うのです。「あなたとわたしの秘密にしてくれないか。やはり市民にアピールするところが何かないと困るから」と。何のためにわたしを呼んだのかよく分かりました。「警備も出すな」と言われ、「あらかじめ知らせるな」ということですね。実際に商店街でケーキを食べて帰っていききました。面白い経験をしました。

### 『早稲田大学年報』『Campus Now』の創刊

矢澤 わたしが重視していた仕事の一つあるのですが、今はどうなっているでしょうか。庶務部長になったとき、早稲田大学には年誌がなかったのです。『商議員会報告』というものしかなかったのです。

聞き手 『早稲田大学年報』ですね。

矢澤 ええ、「年報を出さなければ、これはいけないぞ」と。わたしがそのような意図を持ったのは、大学の歴史を少し勉強したこともあります。年報を出しておかないと、記録が失せてしまうと大変だと思って作ろうとしたのです。評議員会のことを中心に年報を書き、さらに分野ごとに教務、学生、総務、財務、施設と、それぞれ総括文を書いてもらい、そこに資料、データをきちんと載せる年報制度を作ったのです。担当別に、「教務部長、学生部長、全

部部長が自ら執筆して欲しい」と、最初にお願いしました。こうして残しておけば、大学史を作る際に使える根本史料になりますから。

聞き手 今『Campus Now』の特別号という形で、二年前から出ています。

矢澤 ええ。自慢になって恐縮なのですが、『Campus Now』も、わたしが庶務部長のときに始めました。従来の『早稲田大学広報』を变形させたのです。当時までの『広報』が面白くない、一枚のペラで、人事だとか何か通知書の、要するに集約です。「これでは大学が何をやっているか、動きが分からないではないか」と。

広報課長は当時、上素子さんと、「何か月刊でもいいから、できれば一月の中で二回くらい、『Campus Now』を出そうよ」ということになりました。執筆する者をぜひ入れて、考え方をきちんと出せるようにしないといけない。昔の『広報』をごらんになっていただくと分かると思いますが、本当に面白くないのです。通知書をそのまま写して、印刷して配る。それも通知書が出てから二月とか三月もあとに出てくるわけですから、ほとんど意味がない。そのような通知書はもう分かるのだから、『Campus Now』を出そうということ、庶務部長の一年目か二年目のときに考えてやったことなのです。『年報』、『Campus Now』は自分でもよかったなと思っています。

聞き手 『Campus Now』と『年報』は一番役に立ちます。実はそれがもう今は両方ともかなり変わって、『Campus Now』は『WEEKLY』に近いような印象です。『年報』もそのような形で、一番充実していた時代を使わせたかったです。

矢澤 そうですか。このへんは、多少歴史を勉強した者の発想が入っているかと思います。

## 本部機構改革の推進

**聞き手** 事務機構の改革についてお伺いしたいのですが、事務機構はかなり頻繁に動いています。しかし、なぜそのようになったのかといことは全く分かりません。例えば庶務課から総務課になったり、あるいは部課にセンターが設けられたり、それから総長室が設けられたりと、その経緯や改革の意図をお願いします。

**矢澤** 総務部長、それから理事、常任理事の時代にやったことですが、特に本部機構を改革しようと思いました。本部の持っている機能には二面性があるということです。一つはサービス、これは学生に対するサービスもあるし、教職員に対するサービスもあります。それと、もう一つは管理。大学全体を管理していくためのもの。その管理の中に入れてもいいのですが、理事会、理事に対するスタッフ業務。要するに企画、立案をしていく能力。基本的はそのようなものがうまくいかないと理事会が機能しないだろうという考え方があります。それが本部の中に混在しているのです。

もちろんすつきりとそのように分けられるわけではなくて、例えば学生部などをとってみますと、いわゆる理事会のスタッフ機能として重要視されるのは学生の運動、学生のいろいろのセクトの活動、そういったものの実態を把握して、対応していくための策を考えるという側面があります。また例えば、奨学金などの分野は、これは学生に対するサービスとしてとらえ、サービスを徹底しないといけないという仕事はできないということで、ある程度スタッフ機能とサービス機能をそれぞれにきちんと固めていく必要があるということから、サービス機能を中心と当たるところをセンターとしたい。それからスタッフ機能を持つところは、室なり部なりにしたということです。

例えば、総務部などもそうなのです。非常に範囲が広く、清掃関係はサービス機能として全部総務部にありました。現場業務、電話交換だとか運転手だとか、総務部ではそれはむしろ現場管理を徹底してやらなくてはいけない。逆に、同じ総務部の中でも、課の機能によってもものすごくスタッフ機能が大きいところ、例えば法人課などがあるのです。これはほとんど理事会の仕事を中心にした、いわゆるスタッフ機能が中心なのです。昔は一つの小さい組織だったから、課の中でそれを分担してやっていたのですが、だんだん大きくなってきました。そのようなものが混在しているのですが、課で機能は全然違う。そのへんをはっきりさせていきたいと考えました。それで、いわゆる部とセンターと、考え方を分けてやったのです。

一番弱かったのは、本部でも後始末的な業務で整理するだけの仕事に行きがちなものを、「もう少し企画立案、それから提案という形のものができるような職員も養成していきたい」というのが強く気持ちのうえにありました。「その能力を持った職員を養成していくためにどうしたらいいか」とか、「どのような経験、キャリアを積みめばそのようなことができるようになるだろうか」とか、そのようなことを中心に、本部の機能の再編成をしたというのが主なねらいです。

### 海外キャンパス計画への関与

**聞き手** 次に西原先生の時代になると思うのですが、オレゴン州と関係を結びました。西原先生の著書にちよつと出てくるのですが、このオレゴン計画の全体像がわからない。海外キャンパスというは恐らくこれと関係あるのかと思うのですが、そのあたりの話をお願いします。

矢澤 西原先生の時代に一つ考えたのは、海外に研究教育の拠点を作る、ないし海外に高等学校を作ろうということです。これは西原先生を中心に、「これからは海外にキャンパスを持たないといけない」ということで、教務部長のもとで、シンガポール、ヨーロッパ、アメリカと検討を進めました。むしろどちらかと言うと、海外キャンパスというのは、海外子弟の高等学校を作って、海外へ行っている方たちの子弟が、将来早稲田に帰ってこられるようなもの考えたということでした。特にドイツ、それからイギリス、アメリカでも西海岸、それから東南アジアと、そのへんに高等学校を作って、海外へ行っている子弟たちが将来早稲田に入ってもらえるようにし、大学としてもそれがメリットになるのではないかとということをやっていたのです。他から具体的に提案も来たりして、教務部が中心になつていろいろ調査してみたのですが、なかなか話がまとまりにくかった。シンガポールはある程度構想を描いて具体化が始まったのですが、今、渋谷教育学園幕張と早稲田との係属になっていますが、あれなども、最初は早稲田が出ていかなかったのですが、結局、早稲田と提携して早稲田の係属になりました。あれが一つの形になったのです。

ほかに海外に行つて研究を中心とする機関、ヨーロッパのボンにはボンセンターができ、研究者が行ったり、オックスフォード大学の中に早稲田の研究センターのようなものを作ってくれたりしています。それをもっと大きくして、学生が行つてまとまって勉強ができるような海外キャンパスを構想しようというのが、考え方の基本です。

オレゴン計画については、理事会でも相当議論しましたが、なかなか具体的にならなかったのです。オレゴン州立大学にも当たってみたところ、なかなかうまくいかない。そうした中で、ポートランドにあるルイス・アンド・クラーク大学との提携の話が具体化してきました。

この話は北海道校友会の支部長をやっておられた伊藤義郎さんが関与しています。この方は札幌オリンピックのときの組織委員長でした。ポートランドと札幌とは姉妹都市で、伊藤さんも行く機会が多いし、ご自身のお子さんを



イス・アンド・クラークに留学させておられた。この学校は大学レベルとしては、いわゆるリベラルアーツのカレッジで、教養課程が非常に面白いということでした。ここに提携して海外キャンパスをやるうということが最終結論になり、川瀬教務部長が中心だったと思いますが、学生を夏、サマースクールで送り出し、早稲田の先生たちも行って、向こうでアメリカの学生と一緒に教えるということになりました。これがオレゴン計画で、最終的には、ルイス・アンド・クラークと提携して、学部学生を送り込むという形で結実したわけです。

### 小山総長時代の回想

**聞き手** では、引き続き常任理事就任ということで、尽力されたことをお願いします。小山先生が亡くなられてしましまして、お話が全くお聞きできませんでした。それで、小山先生の時代はどのような時代であったかという点も含めて、まず西原先生のとときの常任理事時代のお話からお願いします。

**矢澤** 小山先生が総長候補になられた経緯については、西原先生から、「次の人はだれがいいだろうか」という話があり、いろいろな話が本部内で飛び交いました。新しい選挙制度になっていましたが、やはり「一〇〇周年事業も終わって次の大学のあり方を追求していくためには、かなり大学の管理経験がないとできないだろう」ということで、西原先生の第二次の理事の中で常任理事を経験した人、事情の分かっている方ということで、小山先生がいいだろうということになりました。

ただ、小山先生ご自身はあまり管理者的・経営者的な発想より学者肌の方ですから、そのためにはスタッフをかなり充実していかないとけない。大抵ころの、いわゆるあり方みたいなものは先生自身もお分かりになっていますけ

れども、企画して動くというタイプの先生ではない。奥島先生や西原先生とはタイプが違うのですね。そのような中でわたしも常任理事に選ばれました。

職員の常任理事は、戦後わたしが初めてなのです。小山先生に呼ばれて、「あなたにぜひやってほしい」「これからは職員から常任理事が出なくてはいけない」と言われました。そのような識見を持っておられたのは、小山先生のえらいところだと、わたしは思うのです。たまたまわたしがその中で選ばれたにすぎないのです。わたしより先輩もまだ何人もいましたが、小山先生はわたしを選んでくださった。

わたし自身も、小山先生みたいな方がどつしりと構えておられたほうが仕事しやすいし、当時の常任理事はみんな仕事しやすい方ではないかと思えます。というのも、任せていただけるからです。例えば、評議員の方で外部のどのような方をお願いしたらいいだろうかとか、学外理事にはどのような人をとくか、そのような情報や案をわたしなりに持っていました。

当時、常任理事会は頻繁に行われていました、公式なものではないですが、総長と常任理事と教務部長と総務部長と、場合によっては学生部長が入っていました。そこでいろいろ議論し、成案を得て、いろいろな機関にかけられるケースが多かったのです。そのような中で、小山先生は自分からあまり案はおっしゃらないから、わたしどもは案を作って出して承認を取っていく。非常に包容力があるし、ある意味で非常に仕事のしやすい方だったという印象があります。

教務関係は安藤信敏先生です。それから企画全般は濱田泰三先生。それから学生関係は大畑弥七先生。もう一人、財務は朝岡良平先生が最初入られたのです。途中で辞められますけれども。この五人が常任理事です。総長は、それぞれ仕事を、「ああしろ、こうしろ」とあまりおっしゃらない。それは小山先生のお人柄です。むしろこちらの持つ

ていくものを受けられるタイプの方だったので、わたしどもにとつては非常に仕事のしやすい総長だったということです。自分はこう思っているという考え方を出しやすいのです。

### 総長選挙制度の再検討

**聞き手** 次に一九九〇年、九一年の総長選挙制度の再検討ということでお願ひします。西原先生の後期のあたりから頻繁に、小山先生の時代にかけて、ずっと総長選挙制度の検討が行われています。

**矢澤** これはむしろテクニカルな問題が中心で、あまり制度を大きく変えていこうというよりも、例えば学部比率をどのようにしようとか、そういう問題です。特に一番大きかったのは委員会制による候補者推薦制度ではないですか。各機関から代表で出てきた人たちが複数の委員会を作つて、そこで推薦すべき人をきちんと議論して出す。きちんと議論できたかどうかは別問題ですが、そこで候補者に何人かを挙げて、その中から本人に出馬の意思確認をするというシステム。奥島先生が選ばれたときから実施された総長推薦制度です。

そういったことで、やり方のテクニカルな改革であり、根本的な改革ではなかったような気がします。当時は、選挙管理委員会があつて、選挙管理委員長が総長選挙に関して結果を取りまとめ、理事会あるいは評議員会に報告をする。そのときに、「現行制度にはこのような問題点があります」ということで、これまでの選挙制度を根本的に見直すということではなく、テクニカルな、総長を推薦する仕組みをどうするかとか、推薦文の不規則な発行などお金がかかりすぎるような選挙では困るから、大学が選挙のためにお金を一定の範囲内で候補者に対して出し、その代わりに領収書の提出を求めるとか、そのような仕組みの改革だったと記憶しています。

聞き手 そうすると、何か総長選挙について問題が起こって、改革するということではなかったわけですか。

矢澤 選挙前に無記名の文書が出たり、誹謗文書が出たり、推薦文があちこちからも出るというように、文書合戦が過熱しました。そこで、仕組みがよくないのではないかとということで、ある程度制限していこうと、推薦人がはつきりしたものでないといけないとか、無記名文書はいけませんとか、そのようにいくつかルールが改められていったと思います。

聞き手 お金がかかりすぎるといふ問題も、もちろんあったわけですね。

矢澤 推薦人とか、そのようなものは若干ありましたが、西原先生の時代までは全く野放しでした。実際に大学が助成金を出してこなかった。わたしも記憶がだいぶ薄らいできていますが、文書の届け出制もある程度あったけれども、公開して出した文書は全部届け出制にしようとか、そのようなテクニカルな改革だったと思います。

### キャンパス整備事業の推進

聞き手 西早稲田の再開発事業は小山先生の時代ですね。恐らく財政難で、授業料には限度があるということで、再開発事業という方向に大きく向かっていくポイントが西原先生、あるいは小山先生の時代かと思うのですが、いかがでしょうか。

矢澤 ええ。再開発事業は、最初は西原先生の時代に始まったけれども、集大成は小山先生の時代になってからです。主に担当されたのは濱田先生です。

一〇〇周年の実行委員会、あれはもう濱田先生の独壇場。今の校舎計画など、わたしもお手伝いしましたが、小山

先生の時代に「こうやってやろう」と言って、よく二人で話をしました。濱田先生とわたしとは、そのような点では計画に対する考えが非常に近かった。図書館以来、いいコンビで仕事をさせていただきました。

これには、いろいろな経緯がありました。あそこには安部球場があり、球場の周りにはずっと家がたてこんでいました。片方は土手になっていましたし、大学に接する方は道路です。相馬家から甘泉園を購入したのは、一九三五年前後だと思います。野球場と甘泉園の間の、今、新目白通りに面しているところがあります。あそこに相馬家時代から住んでいた人たちは、結局どこせられないで、ずっとそのまま住んでいて、しもた屋の古いうちがずっとたくさん並んでいました。大学にとって、家賃収入も地代収入もほとんどない。いくつかは空き地になっていて、大学が売らないまま所有している土地がありました。そこで、「あのままだいまでも放置しておくのはよくないではないか」「大学財政にも資さないし、整理して再開発すれば大学の所有部分が出てくるから、はつきりさせた方がいい」と考えました。地権者は大学だけなのです。「土地を早稲田から借りて自分の建物を持っている人たちに話をして、外へ出る人はそれを補償し、整理統合しよう」ということになりました。住環境もよくありませんでした。

もう一つは、明治通りの内側に環状道路を作るといふ東京都の計画がありました。護国寺のところ、首都高の護国寺のインターからずっと目白へ上がっていく広い通りがあります。あの道路がずっとこちらまで来て新たな環状道路になる。それを造りたいということです。目白の丘のところができていないので、全部貫通することはできないけれども、大学が土地を提供してくれば、その補償金を出すということです。これは採算に合うぞということで、理事会で検討しました。そして、再開発事業をやってみようではないかということ、総合企画部を中心にチームを作りました。

住民を集めて、このような住居環境ではしょうがないから、再開発をしたらどうかということで提案しました。最初はかなり難航しましたが、住民の賛成が多く得られました。ただ利益がいろいろ違いますから、現在あるように建

物を集約するというのは、かなりいろいろ困難があったのです。

結局、最終的には、新目白通り側を今まで住んだ人たちや、今後住みたい人たちの住居等にしました。大学寄りの環状線に沿ったところは、大学が所有すれば、今までのような家賃も地代も入ってこない土地よりはいいだろうというところで構想を立てたわけです。何年もかかりましたが、結局、何とかできました。

従来の大学と住民だけの再開発では必要な事業費が出ないので、一部を分譲してタワービルを作り、それで再発事業の採算を取るようにしました。

新宿区が非常に力を入れてくれて、成功しました。従来のことを思えば、非常に成功した、大きな仕事だったと考えています。

**聞き手** 続いて現キャンパスの整備事業ということで、本部キャンパス、今で言う早稲田キャンパスの方をどうするかという考えが出てくるように思いますが、そのあたりについて伺いしたいと思います。あとA棟に関しては、一〇〇周年事業ではないと思うのですが――。財源的な手当てとか、どのような位置づけだったのか、そのへんをお聞きしたいと思います。

**矢澤** だいぶ記憶が薄れてきているところがありますが、一〇〇周年記念事業が終わり、大学の周辺の土地はできるだけ買って、本部キャンパスの拡充を図っていいこうということで、特に力を入れたのが大隈庭園の裏側と、早稲田ゼミから買ったあたりです。事業がうまくいかなくて土地を手放す人が増えていったので、それができるだけ大学としても買収していいこうということになりました。

もう一つは共通教室の上の地所で、早稲田通りに面している土地は、将来、大学キャンパスが大隈講堂から早稲田通りに抜けるためには買わなければだめだと、西原先生の時代からいわれて来ていました。少し高くてもいいからあ

そこを買って、将来の早稲田のメインキャンパスをもうちょっと拡充していこうと考えました。

そして、それにあわせて古い建物の一四号館、あれは大正時代最後の建物で、旧第二高等学院の建物です。それから、小さいけれども講堂前の診療所。あの建物は学生相談センターにもなっていました。それから図書館移転後の問題。そのような問題を含めて、総合的に大学の再整備計画をやるとういう考え方が、西原先生の時代にもうすでに芽生えていました。一〇〇周年の次のステップに大学をどう持っていくかということです。それとあわせて、本部の移転の問題を含め再整備として土地信託によるホテルの建設が、これも西原先生の時代から発想され、具体的に建てる契約をしたのも、先生の時代です。

周辺のがきちんとしていった段階で、やはり早稲田キャンパスの整備をやっていかなければいけないということです。それにはやはり学内の合意が大変難しい。しかし、やらなければいけないということで、審議会ができました。将来計画審議会です。今考えると退屈な審議会でしたけれどもね。

授業が終わって夜になると一〇〇人の教職員の代表が、お弁当をとりながら会議をしました。全学から集まったが、意見は決まった人しか言わない。しかし、あのような機関を通したので、学内の、いわゆる学部中心のセクトによらないで、大学全体として、どのようにキャンパスを持っていきたいかという企画ができたのだと思います。

大体、濱田先生を中心に、建物の再建築計画を立てました。その基本は、大隈講堂、それから大隈講堂の前の周辺、あそこは歴史的保存地区として原則として手をつけるな。そのほかの建物は昭和の大体一桁から二桁の初めにかけて建てられた建物なので、順次整備していこう。そのような大きな構想がありました。それを、仮称でA棟、B棟、C棟と呼んで、一〇〇周年記念事業とは切り離し、一二五周年とも切り離したわけです。こうして、一四号館の建替えから始まったという経緯があります。

大学もこれに賭けているため、比較的長期間かかりましたが、合意が非常に得られやすく、納得性があつたということです。A、B、Cまでの計画ができ、そして、ホテルなど周辺の整備は大体もう終わっていました。それで、いよいよ本部キャンパスの内部に手をつけていかないと、古い校舎のままではいけないよということ、それが発端だつたと思います。時間と大勢の人たちの会議という、多少の浪費はありましたが、あのような手立を経ないと実行できなかったということです。

小山先生のとときにB棟までは具体化しており、案としてC棟まではあつたのですが、C棟の実現については、全く予算化されていません。A棟だけについて、小山先生時代に予算化が実施されました。

聞き手 あれだけ大きな建物で、募金という形ではしてないと思うのですが――。

矢澤 ええ、A棟はいろいろ今までの、再開発事業やホテル建設の土地信託による資金などによって財政的見通しを立てていました。

聞き手 A棟が一番最初だったというのは、何か理由があるのでしょうか。

矢澤 前にも述べたように建物が古いです。それと、そこに社会科学部は入っていましたけれども、社会学は非常に不満足。古い汚い建物で、やはり共通教室が少なかったものですから。あそこから手をつけようというのは、長期計画検討委員会です承されていました。それで、A棟だけが具体化していたということです。B、Cは構想の中にあつたということです。

聞き手 奥島先生の時代にB棟かと思いましたが、そうではないということなのですね。

矢澤 C棟までは考え方はありました。それで、四号館を解体してB棟。それから、商学部の一―一―号館と、一二号館を解体してC棟。この基本計画はそのときから立てられていたのです。ですから、それを奥島先生の時代になつ



て、B、C棟が実行されたというように考えておかれていると思います。

その後の構想は変わったのかもしれないけれども、わたしたちの描いたときの構想では、銅像の右手の建物、七号館。あれは昭和二〇年代の後半に造られていたから、割合古い建物なのです。わたしたちがいろいろ調査した範囲でも、あの当時は鉄骨材料が非常に乏しいときであり、もう一つはコンクリートに海砂を使っているのです。海砂というのは、非常に壊れやすい、分解しやすい。それで、あの建物は長く持たないという診断がありました。そこで、建物が高層化していき、空間が狭く感じるから、あれを壊してあそこは緑地地帯にしようというような構想で進んできたのです。はたして今の理事会はどのように考えているのか。B棟、C棟を作った段階で壊すという、確か長期計画ではそういう構想でした。あそこを広場にして、場合によったら小さな池を作ったり、噴水を作ったりして、学生が憩い、演博が見えたりする。古い六号館も将来壊すとして、空間を確保しようという、そのような計画が基本だったと思います。ですから、大体、言われているとおりに出てきているのですが、まだあそこは壊されていませんね。

聞き手 ええ。むしろ今は三号館のところのD棟計画の方が優先で、もう動いています。

矢澤 そのときに代替建物がないと困るからそれまではつぶせないという、そのような感じになってきている。わたしたちのときには、D棟計画は全くありませんでした。政経学部はもう建て替えた方がいいのと、古い方がいいという二つの考えがありました。

聞き手 今は変わっています。

矢澤 それはそうでしょうね。商学部や、国際教養学部の、あのようないい建物ができると。七号館はどうなりませんか。

聞き手 七号館を壊すというのは、最近はあまり言われていないようです。

矢澤 わたしたちのA、B、C棟の前提は、あれを壊して広場にするということでした。基本的には西原先生の後期から小山先生のときに、A、B、C棟はまとめられた構想です。

聞き手 ちょっとこれは前の話になりますが、グリーンハウスの解体について、どのような経緯があったのでしょうか。

矢澤 わたしが知っている範囲で申し上げますと、あれは元々は本部キャンパスにあった建物で、昔の教室棟です。東伏見を買ったときに、こちらから移転させた建物です。スポーツ関係の学生の更衣所のようになっていました。ただ、こちらにあったときは一番古い教室で大事なものだという認識がありました。

これはまさに小山総長の時代です。濱田先生を中心に、東伏見も何とかしなければいけないということになりました。それは、こういうことなのです。大学の設置基準に中心校地という概念がありまして、ある学部の新設や、定員増加を図ったりする場合には、中心校地の大きさ、土地の広さ、建物の面積がある一定以上ないと、定員変更したり新しい学部はできないという考え方が、大学設置基準にありました。

東伏見は大学から距離がありすぎるから、中心校地にカウントができない。ところが、所沢にもキャンパスを作ったわけですから、両方から考えれば、もう中心校地に入れているのではないかとということで、文部省と折衝していたのです。しかし、それには教室がないと中心校地という名目にならない、学生が日常的に生活しているスポーツのクラブだけではだめだということです。

人間科学部も所沢に行ってしまいましたから、体育局を東伏見へ移転させたいという、そのような経緯もあって、多少無駄とは承知しながら、あそこに教室棟を作ったのです。

それで、体育の授業のための教室がなかったから、できるだけ所沢からも早稲田からも行けるようにしようと考え

ました。その他、体育館も合宿所も全部再整備して、一つの大学のキャンパスとしての位置づけをしないといけない。これを中心校地にカウントしてもらえれば、キャンパスの面積全体が広がるわけです。東伏見の計画の基本は、そのようなことでできていました。そのときにグリーンハウスが無用になりました。要するにあれを残すわけにいかなくなったのです。

それで、実際に建物の質を見てもらったら、木造のため腐食が進行しており、このまま建っていたら学生が足を踏み外したりするケースもあり、実際にもう沈下していました。早稲田の明治時代の唯一の建物だから、何としてもあれを再生してどこかへ置こうということで、軽井沢校地の教職員の宿泊所として追分に持つて行こうと考えました。しかし、いざ解体してみたら、もう虫食いで、移転はできない。そのようなことで、グリーンハウスの移築はもう無理だということになりました。それに替わる同じ建物として、「このようなものが早稲田の教室としてあったのだ」というメモリアルなものとして、同じ大きさ、同じ形のものを軽井沢に造りました。もう少し前に手をつけておけば保存できたのでしょうかともね。

**聞き手** 文化財の指定はされていなかった。

**矢澤** もちろん、されていません。すべて東伏見を中心校地にするための一つの手段だったわけです。もう一つは、野球場や、大隈庭園の裏にあったテニスコートもそうだったのですが、やはりスポーツ施設を充実してできるだけそこへ移す。東伏見をそのような形で活用しないと、全体の再整備ができないという構想がありました。

野球部の移転は苦労しました。あれは西原総長のときです。庭球部もかなり抵抗がありました。庭球部も西原総長のときです。

正田健一郎先生がたまたま野球部長で、安部球場のところに図書館を造るという構想を一〇〇周年構想委員会のと

きに打ち上げていますから、内々に正田先生にお願いして働きかけてもらい、大隈会館に野球部OBの首脳陣、わたしたちが子どもの時分の名投手、名選手がずらっとそろって、「そのような野球部の移転は認められない」と、初めは頑固に言っていました。しかし、西原総長が一生懸命説得され、「このような施設にしますから」と言って、最後は皆さんに合意を取りつけるという経緯がありました。

最初は実は野球部は所沢に行く予定だったのです。所沢の予定で、川瀬先生を中心にして一生懸命になって、所沢に野球場を造ったのです。ところが環境保全地区だから、せっかくナイター設備まで造って、夜電気をつけられるようにしたのに、それができない。環境保全運動の反対運動ともありました。野球部も所沢だったら行かない、動かない、東伏見なら行くと、そのような条件を出してきました。

最後はこれも西原先生のと看で、小山先生が引き継いだ形です。そこで、東伏見の陸上競技部を所沢へ移そうと考えました。人間科学部に作った陸上競技場は、東伏見からの移転を前提にしている。公認の四〇〇メートルトラックで、記録が公認されるような規模で作ったのです。それで競走部は了承しました。

ただ、「寮を造ってくれ」というので、これも大変だったのです。所沢キャンパスの一带は緑地指定の特別地域で、寮のような宿泊施設が建てられないのです。ところが、たまたま古い土地の農家の方が本宅を壊したのです。元からあった本宅の跡だから、そこなら建物を建てられるということで、そこを借地して、合宿所を造ったのです。キャンパスから五分くらい離れたところです。このような苦労がありました。

## 大学史への要望

聞き手 では最後になりますが、『早稲田大学百年史』、長い時間かけて編纂されましたが、特に新しい時代のところ、第五巻のところのご感想など、どのようにお考えになっていらつしやるでしょうか。

矢澤 やはり戦争中の歴史が、ちよつと少ないかなと思います。戦中、要するに田中穂積総長から中野登美雄総長の戦争中の記述が、資料がないのかどうか知らないですが、少し希薄だなという感じがします。一応書けていますけれども。それから戦後の津田左右吉先生を総長に出そうとか、島田総長の時代も記述が少し希薄かなという感じを持っています。

と言いますのは、七十年誌は稲垣達郎先生が中心になったのかな、七十年誌は学生向けということもあつたけれども、資料もないから、どちらかというと歴史系より文学系の先生たちが中心になって作られました。上は写真半分で、下が文章でしょう。あれは少し弱いです。読み物としては非常に面白いですが。あのへんに問題点が幾つかあつたのではないかなと思います。要するに、新しく大学設置基準ができて新制大学に変わって、それで作られていく過程です。前から読んでいて、大濱総長に引き継いでいく部分、一九五〇年代にもうちよつと書くことがあるのではないかなという感想を持っています。

戦中からの記述が少ないなというものがあつます。今、そのへんは資料を集めるのが、一番大変な時期かもしれない。大学も混乱していましたから。

八十年史もちよつと書き方が、中西敬二郎さんと木村毅さんの書き方というのは、少しわたしは納得がいかない。

歴史的記述より、何と言いますか、ちょっと読み物的記述が多すぎて、物足りない。

聞き手 百年史の編纂のことなどに關して、何かご存じのことなどがありますでしょうか。

矢澤 百年史編纂は、時代的にはもうかなり前、一九六〇年代の前半あたりから木村さん中心に始まっていますけれども、なかなか大学もスタッフを割けなかった側面もあるのです。専任スタッフがちょっと少なかったという感じはしていました。正田先生とか皆さん、片手間にやっておられたですね。

大学史編集所の前身は校史資料係でしたが、スタッフ不足だったような気がしますね。資料集めもなかなかできていないなという感じでした。『早稲田大学史記要』がありましたが、あれを書くためにやっているような組織で、資料集めはちょっと弱かったのではないかと思います。皆あところは学部でも本部でも、それぞれが自分のところで資料を墨守していましたから、そのような中で資料を集めるといふのは大変だったと思います。

(終了)

註

(i) 矢澤西二「図書館から学術情報センターへ」(『早稲田大学図書館紀要』第三〇号、一九八九年)